12月19日 西原町の文化発展に貢献

令和7年12月、沖縄県文化協会表彰式において、西原町文化協会の金城清さん（功労賞）、玉那覇静子さん（奨励賞）、同協会箏曲部会（団体賞）がそれぞれ表彰を受け、その報告のため町役場を訪れました。

これらの賞は、地域の文化活動に参加し、文化の向上に尽くした個人および団体に対し、沖縄県文化協会から贈られるものです。

崎原町長は「西原町から2個人1団体が受賞され、大変うれしく思う。これからも地域の発展のため、ご尽力をいただきたい」と激励しました。

1月4日 筆先に思いをこめて

西原町文化協会・書道部会が主催する「西原町新春かきぞめ会」が、西原町中央公民館で開催されました。当日は、新たな年の幕開けを祝うように、こどもたちを含む24名の町民が参加し、新春の恒例行事を楽しみました。

参加者は、今年の目標や決意を一文字一文字丁寧に書き上げました。思い思いの言葉が綴られた力作を手に、会場は晴れやかな笑顔に包まれていました。

1月8日 西原町の魅力を世界へ！英語版観光ガイドブック完成

沖縄キリスト教学院大学人文学部英語コミュニケーション学科4年次の澁谷碧さん、嘉陽宗也さん、兼城麗愛さん、又吉嬉美さんの4名がゼミの卒業研究として「西原町観光ガイドブック」の英語版を作成し、町長へ贈呈しました。

学生代表の澁谷さんは「西原町の魅力を海外の方にも知ってほしいと思い、英語版を作成した。このガイドブックが西原町を訪れる多くの方々の助けとなり、町の魅力を知るきっかけの一つになれば嬉しい」と完成の喜びを語りました。

崎原町長は「チームで苦労を重ねて作り上げたこの英語版は、西原町をさらに発展させると思う。皆さんの今後の活躍に心から期待している」と感謝とエールを送りました。完成した英語版ガイドブックは、今後大学側と連携しながら、様々な場面で活用される予定です。

1月9日 丙午の如く、勇壮に地域を守る

令和8年東部消防組合「消防出初式」が同組合構内で開催されました。式典では、管理者による特別点検に続き、表彰式が行われ、令和7年11月に西原町で発生した火災において迅速な初期消火活動により延焼を防いだとして、会社員の照屋良太さんと饒波貴市さんが功労表彰を授与されました。

また、展示訓練では建物からの救助訓練が行われ、日頃の研鑽の成果が披露されました。最後は、消防職員と消防団員による迫力ある「合同一斉放水」が行われ、参加者全員が新年の防火への決意を新たにしました。

1月12日 サッカーJ1「ヴィッセル神戸」歓迎セレモニー開催！

サッカーJ1リーグ所属の「ヴィッセル神戸」のサッカーキャンプ歓迎セレモニーが西原町民陸上競技場で開催されました。セレモニーでは、町や町関係団体・事業者の皆様から県産フルーツ、島どうふをはじめとする町内の特産品が贈呈されました。

ミヒャエル・スキッペ監督は「施設を最大限活用し、新シーズンに向けていい準備をしたい」と意気込みを語りました。

崎原町長は「ヴィッセル神戸が3年連続で西原町でキャンプを行い、それが町民に定着してきている。今キャンプでは充実した時間を過ごし、新シーズンでのさらなる飛躍に向けて頑張っていただきたい」と激励の言葉を贈りました。

マイナンバーカードをお持ちの方は、土日でも、役場にいかなくても、コンビニで住民票等が200円で取得できます！

～ 戦後80年 記憶の継承 ～ No.5

沖縄戦の終戦から80年を迎えた今日、戦争体験者の減少、戦後世代の増加と相まって、戦争の歴史的教訓が年々風化し、その悲惨さが忘れ去られようとしています。

西原町は、戦争体験者の方々からの貴重な体験談を紹介し、次世代へ継承していきます。

目の当たりに見た原爆地獄
（西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録より）

島袋宗盛(当時28歳) 軍需工員

徴用工員

私は、昭和16年に徴用工員として長崎に行った。その時、沖縄から160人の徴用工員がいたが、彼らを2班に分け、私と我謝さん（浦添出身）の二人で引率して行った。徴用工員は那覇の開洋会館で4～5日ほど訓練を受けてから出発した。当時は敵の潜水艦もおらず、長崎港までの船旅は二昼夜ぐらいしかかからなかった。長崎では三菱長崎造船所（軍需工場）で働いた。そこには大勢の工員がいた。私は外板組み立ての仕事をやった。上からクレーンで部品を巻き上げるので、それを下で組み立て、船の外形を作る仕事であった。仕事は忙しく、毎日残業であった。時には徹夜で残業し、朝帰ることもあった。ところが、徴用作業なので給料は安く、残業でもしなければ生活できなかった。ちなみに、請負業者の下で掃除などをやっている婦人たちの給料よりも安かった。ほんとに馬鹿らしい限りであった。長崎では、最初は寮に住んでいたが、妻を呼び寄せて（昭和17年）からは町で間借り生活をした。また、長崎では、戦争といってもB29が空襲する時壕に避難し、空襲が止めば壕から出る、という程度であった。

長崎での原爆光景

ところが、昭和20年8月9日、長崎に原爆が投下された。その日は朝から空襲警報が発令され、町の人たちは、皆避難していた。しかし、造船所は、空襲警報発令中にもかかわらず、敵機の来襲がないので仕事を続けていた。午前11時35分か45分ごろ、2,000～3,000メートルの上空に敵機B29が1機飛来し、大きな気球のような物（原爆）を投下して飛び去って行った。その気球のような物は上空でフワフワ浮かんでいたので、「不思議だなあ」と思って見ていたところ、2～3分後には爆発し、目の前が真っ暗になって電気のようにピカッと光った。爆心地の近辺は、ガラス、土、砂、石などが爆風で吹き飛ばされた。造船所の裏山には、機械を疎開させるために、大きな壕を掘ってあった。原爆が投下されたのは、私たちが旋盤機をその壕に移動するために壕の入口手前4メートルほどのところに来たちょうどその時であった。私たちが壕の入口手前で原爆投下を目の当たりに見ていた時、原爆が爆発し、私たち5人は、爆風で一遍に壕の中まで吹き飛ばされていた。そこは爆心地から5キロメートルも離れたところであった。幸いに怪我はなかった。爆心地は見る見るうちに火の海となり、5日間も燃え続けた。燃えた跡がまた凄まじかった。三菱電気のアングル造り4階建て工場は、押し潰されて平家建ての高さになり、工場の面影など全くなかった。住民は、朝から空襲警報が発令されたままで解除にならないものだから空腹を感じ、昼食をとりに家に帰っていたところであった。そのため、家族揃って食卓を囲み、座ったまま焼け死んでいる家族や、道端に座って黒く焼け死んでいる人たちもいた。また、橋の上や溝に吹き飛ばされ、火傷を負い、「水をくれ。水をくれ」と水をほしがる人たちもいた。しかし、水もないのでどうすることもできなかった。更に、電車に乗っていた人たちもみんな焼け死んでいた。このように原爆で焼け死んだ人たちの遺体は1か所に集められ、生き残った人たちの手で火葬に付された。火葬といっても、焼け残った家の柱などを取ってきて薪代わりにし、それで死体を焼くというものであった。それが1～2週間も続いた。原爆は、一瞬にして多くの長崎市民の生命、財産を奪った。原爆の熱は、青々とした樹木もすべて焼き尽くした。普通の重砲などは砲弾の落下地点にしか被害は及ぼさないけれども、原爆の場合は、平坦地だと広範囲に被害を及ぼす。長崎の場合は、山が多いので、山と山の谷間の部分はいくらか焼け残り、平坦な広島よりは被害が少なくて済んだのではないか、と思う。原爆投下の際、直接には被爆せず、元気だった者でも、自分の家族を救出したり、遺体を収容したりするときに被爆した人たちもいた。そうした元気な人たちでも被爆後何日か経つと、頭の毛が抜け出した。そして、頭の毛が抜け始めると、3日後には死亡した。それで、みんな、自分は大丈夫かなあ、といっていつも頭の毛に触ってみたりした。頭の毛が抜けて死んで行った人も多数いた。ほんとに、原爆投下後の地獄のような光景は、見た人でないと想像つかないであろう。原爆の使用は人類の滅亡につながるものである。二度と原水爆の使用を許してはならない。原爆投下時、妻は町中にある家にいた。造船所から見ると、自分の家の方もぼんぼん火が燃え盛っていた。妻のことが気掛かりだったけれども、造船所から外に出ることは許されなかった。ようやく夕方になってから、燃え盛る町中を通って自分の家に行って見ると、家は屋根瓦が吹き飛ばされてはいたが、幸い焼けずに残っていた。

「西原町史」は西原町立図書館でご覧いただけます。